

Title	東亞天文政策
Author(s)	山本, 一清; 乾, 久朗
Citation	天界 = The heavens (1939), 19(217): 200-202
Issue Date	1939-04-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/167812
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東 亞 天 文 政 策

山 本 一 清

第15回神戸支部例會に於ての御講演を抄記せしもの（文責任、乾 久朗）

今や祖國は東亞に聖戰を展開してゐるのであるが、今宵私は特に東亞の持つ天文學的使命、並びに政策に就て論じて見たい。東洋を見る爲めに先づ世界を見てみやう。今日天文學の世界の中心は何と云つても中歐にある。その一例として今日迄6回を重ねた國際天文同盟總會も内1回米國で開かれたのを除いては全部歐州に於て開かれ、来る可き第7回總會亦瑞西であると云つた具合である。

米國は今日全世界の天文器械の $\frac{1}{4}$ 乃至 $\frac{1}{2}$ を包含、人材としても優秀なる陣容をそなへてゐるのであるが、學會をリードするものは目に見えぬあるものによるのであらうか、世界の中心ではない。

觀測上の位置及び觀測者分布の見地から東洋は獨自の使命を持つ。然るに天文學的にはまだまだ幼稚である。日本を除いては上海の町はずれと、ジャワにある天文臺が主なるものであるが、その人を得ず決して盛んではない。印度、澳洲、ニュージーランドの一部にも天文臺はあるが政府の獎勵も少なく、今日世界中最も怠けてゐる天文臺と成されるものである。メルボルンには48吋の望遠鏡があるが、金屬製にて大したものでない。シドニーのは太陽研究所として種々のレポートを出してゐるが、まあその程度のものである。

之れらを辛うじて凌いで存在してゐるのが日本である。然し最近の天文的トピックは大阪及東京のプラネタリウムである。天文學普及の爲めに相ついで二つも出来たのは注目すべき事であるが、現在の所たゞ營業的領域を脱してゐないのは残念である。又天文臺としては僅かに東京と京都位なもので、内東京は設備の點では世界有數（歐州にはこの種の天文臺は千を數へるが）のものであるがその業績に至つては、實に500番以下にあたるものであらう。

次に歐・米・日の緯度を比較するに 歐は50度、米は42.3度、日は35度で、この點だけでも我が天文界たるものは大いに感憤すべきであると思ふ。歐州の天候

は夏が良く冬は悪く、其夏の夜も高緯度地方特有の短か夜で、観測可能の時間は著しく短縮されるし、米國並びに今日米國に次で大きな仕事を果してゐる露西亞は又激しい寒氣に可なりな難澁をしのびつゝ偉大なる足跡を印して居る。

我國では北海道及東亞地方は緯度の割合に寒く観測に不適であるが、あらゆる條件を考へて、岡山、廣島兩縣附近が最も都合よく、今後天文觀測の中心になる可きであらうと考へられる。臺灣も其緯度としては世界中之れ程條件のいい所はない。又委任統治領たる南洋に於ても天氣さへ宜ければ觀測にはまことに恵まれてゐる。

更に、今や提携の實あがりつゝある滿支を見るに、滿洲は我國の東北地方の如き氣候であるから多くは期待し得ないが、天文臺を設置するならば、旅順、大連附近の所で、奉天はシカゴと同緯度であるが、條件は著しく不備だと考へる。次に北支方面はスペイン、カルフォルニヤに匹敵する緯度を持ち將來有望であらう。中南支は餘り見聞してゐないが、天候さへ恵まれれば臺灣同様觀測には好適であらうと思はれる。

序でにお隣りの印度、印度支那を一瞥しやう。印度には現在10許りの天文臺あり。ハイデラバト、マドラスが其の主なものである。コデ・カナルにも太陽研究所あり、此處の觀測結果は倫敦に送られ、英本國より發表されてゐる。印度支那は一昨年一ヶ月許り滞在した事があつたが曇り續きて仕事は不能であつた。シンガポールは赤道直下の都市として、此處ではいい天文臺が出来さうだと思ふ。

更に南阿、濠洲、南米を概論する。南亞は流石英國が既に百年以上前から注目、ケイプタウンの郊外に天文臺を設け、一年中三百幾日まで觀測可能と云ふ好條件に續々大天文臺が出来る様になり、オックスフォード大學中にあつたラツドクリフ天文臺が80吋を提げて南亞に移り、時は前後するが和蘭のライデン、米のデトロイド、ハバート各大學も天文臺を此處に持つに致つた。(ハバートのはベルムのアレキパのを移したのである。)

濠洲は南天の觀測に恵まれ、南阿に次で立つ可きものと思ふが未だ不振。南米また昏々として惰眠をむさぼり、僅かに國の體面上天文臺を持つて居るに過ぎない。

かく考へて來れば東亞及日本の天文學的^{てんもんがく}位置が經度上、緯度上如何に重要であり、如何に恵まれてゐるか判ると思ふ。東亞天文協會の使命も亦大なりと云ふ可きである。今や舉國聖戰の折柄天文臺新設の時機ではないかもしれないが、世人の考へる程莫大な費用を要するものでもなく、世界一流の天文臺さへ100萬弗もあれば十分で、リックの設立費でも70萬弗であつた。ウィルソン天文臺も創立以來今に至るまで1,000萬弗を消費してゐない。嘗て滿鐵が大天文臺設立を計畫し、精々500萬圓位で出来たものを中絶したのは残念であつた。必ずや近き將來にかうした天文臺が續々設立されて然る可しと思ふ。

吾人は更に日本の天文學界の現状を正しく知らねばならぬ。獨自の分野を持たず外國からのみ材料を得てゐる日本天文學者は他方日本語論文許り發表してインターナショナルに目覺めぬ缺點も持つのである。殊に日支事變の後、日本人全體が國際的に疑はれ恐れられてゐる爲めが天文學的材料も日本だけは封鎖せられてゐる狀況にある。この點深く内省を要すると思ふ。

吾人の當面に爲し得る問題は色々ある。プラネタリウムを北京に作る事も一つである。古來敬天思想に養はれて來た支那人は想像以上に強く考へると思ふ。日支親善に役立つ事は云ふまでもない。東亞天文協會としては死滅望遠鏡の活用法もあらうし、日々の新聞に天氣圖と同様、黑點の圖を載せるのも一般民衆に豫期しない興味を湧かせる事ともなう。

要は人間の問題、人間の意志、意氣、使命觀の問題である。グラスゴウのベツカイ氏は“一冬に48時間しか星が見えず”と云ひ乍ら而も倦まざる眞摯な努力をつゞけてゐるではないか。

〔209頁より續く〕

* プレイアデス、オアリオンの^か曇き力をのがれむと、霧立つ海にとび入る時は、もろもろの嵐かまへて荒るゝ時たり。さあらば早や、沸きたつ海に船をとゞめず、わが言ふごとく、陸を^か耕やすことを思ひ出づべし。船は陸に引きあげ、しめれる風の吹きあてざるやう。めぐりを隙なく石もて固み、空よりの雨に濡れざるやう船ぞこの档を抜くべし。(619—23)

* 十月末又は十一月初めを言へり。